

説教題：「OIC のアイデンティティ、パート 3—洗礼と主の晩餐（聖餐）の儀式」

鍵となる聖句：使徒 2:41-42 「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。⁴²そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」

皆さん、おはようございます。また皆さんにお会いできてうれしいです。私は、教派を超えた福音主義的なプロテスタント教会としての大阪インターナショナルチャーチのアイデンティティをテーマに、一連の説教を行ってきました。最初の説教では、「プロテスタントであること」「福音主義であること」「教派を超えていること」という3つの形容詞のそれぞれの意味を説明しました。私たちは異なる教派に属していますが、正統派プロテスタントと福音主義キリスト教の基本的教義を堅持しています。これが私たちの共通点です。しかし、私たちは異なる教派の出身であるため、私たちの間には間違いなくいくつかの相違点があります。それにもかかわらず、私たちは互いに慈愛の心を持ち、キリスト教の弟子としての歩み、交わり、奉仕において共に歩むことを目指します。

このシリーズの第2回目の説教では、大阪インターナショナルチャーチの会則に記されている「目的」に焦点を当てました。もう一度、その文章を読んでみましょう：

本教会の目的は、神を礼拝し、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、教え、主の晩餐とバプテスマを祝うことにある。私たちは、すべての人を主の救いの知識に導き、神の礼拝を共にするためにイエス・キリストに従う者同士を結びつけ、人生のあらゆる関係においてイエス・キリストがよりよく知られ、よりよく愛され、よりよく仕えられるように努める。

OIC の主な目的のひとつは、洗礼と主の晩餐（聖餐式とも呼ばれる）を祝うことである、という最初の文章に注目してください。今日の説教の焦点は、キリスト教会のこの2つの重要な儀式にあります。キリスト教時代の初めから、この2つの儀式は教会生活と宣教に不可欠なものでした。私が「儀式」と呼んでいることに注目してください。どちらも独自の機能を持ち、何かを象徴するものとして注目されています。何を象徴しているのでしょうか？それを説明することが、今日のメッセージの目的の一つです。

今日の説教のタイトルは「OIC のアイデンティティ」です：洗礼と主の晩餐（聖餐式）の儀式"です。キリスト教の伝統では、この二つの儀式はしばしば「秘跡」と呼ばれてきました。「秘跡」とはこのように定義されています：「恵みの目に見えない現実の目に見えるしるし」であり、あるいは「贖罪の神聖な神秘を教会を超えて指し示す教会内のしるし」である。¹ プロテスタントのキリスト教徒は、教会生活にとって重要な2つの秘跡、すなわち洗礼と主の晩餐について語ります。多くのキリスト教徒はこの2つの儀式を「秘跡」と呼びますが、プロテスタント運動の他のキリスト教徒は「制定」と呼ぶことを好みます。というのも、この二つの儀式は、キリストがすべてのクリスチャンに参加するように命じた、つまり命じられたものだからです。（マタイ 26:26-29、28:18-20、また第一コリント 11:23-26）。私が関わってきた福音主義教会のほとんどは、これらの儀式を「制定」と呼ぶことを好んでおり、OIC でもそのように呼んでいます。

先程、秘跡とは、「贖罪の神聖な神秘を教会を超えて指し示す教会内のしるし」だと言いました。洗礼は、キリストにある新しい人生へ向かうしるしです。エペソ人への手紙 2 章 5 節にあるように、私たちはかつて「罪のために死んでいましたが、今はキリストによって生かされています」。そして、主の晩餐は、私たちの罪のためのキリストの犠牲、私たちの贖いを思い起こさせるしるしです(コリント人への手紙第一 11 章、マタイの福音書 26 章) であり、私たちの一致を象徴するクリスチャンの兄弟姉妹と分かち合う食事でもあります。さらに、主の晩餐は、キリストが御国を樹立するために再臨されるときに、キリストとともに食事を分かち合うことを予期させるものでもあります。そのため、主の晩餐は聖餐式とも呼ばれるのです。それは、仲間のクリスチャンとの交わり、そして主との交わりなのです。

では、キリスト教会のこの 2 つの制定（または秘跡）を詳しく見てみましょう。

パート 1: 主の晩餐 (聖餐式)

これは、私たちの主イエス・キリストが十字架につけられる直前に制定したものです。マタイの福音書とルカの福音書を読んでみましょう。

マタイの福音書 26:1-2 – 「**1** イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。**2** 「あなたがたの知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

それから 2 日後、次のことをルカの福音書 22:7-8 で読みます。 – 「**7** さて、過越の小羊のほふられる、種なしパンの日が来た。**8** イエスは、こう言ってペテロとヨハネを遣わされた。「わたしたちの過越の食事ができるように、準備をしに行きなさい。」

マタイの福音書 26:26-28 – 「**26** また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」 **27** また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。**28** これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」

私たちはこのエピソードを「最後の晩餐」と呼んでいます。主イエスが十字架につけられる前日、弟子たちと過越の食事を共にしたときのことです。ユダヤ教の過越の祭りとのつながりに注目してみましょう。この祭りは、出エジプト記に記述されているように、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放されたことを記念するもので、神がエジプトにもたらした十の災いの最後には、子羊を生け贄として捧げ、その血を家の門柱に撒いた家庭の子供たちを除いて、国中のすべての初子が死にました。出エジプト記 12 章で、その物語を読むことが出来ます。滅ぼす天使が来たとき、その天使は子羊の血を門柱に塗った家々の上を通り過ぎ、何の影響も受けませんでした。その天使はこれらの家の上を通り過ぎたので、この祭りは過越祭りと呼ばれるようになりました。

キリストは私たちの過越の小羊と呼ばれ、私たちを裁きから救うための犠牲となる小羊です。

コリント人への手紙第一 5:7 後半でこのように言われています – 「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」先ほど読んだ聖句を思い起こすなら、最後の晩餐とキリストの十字架刑は、毎年行われる過越祭りの時に行われ、イエスの死は過越祭の犠牲と同一視されているのが分かります。

イエスはパンと杯を、罪の赦しのために多くの人のために流される御自身の体と御自身の血とを、どのように結びつけておられるかに注目してほしいです。パンとぶどう酒は、イエスの体と血を象徴しています。彼の体はやがて十字架にかけられ、その血が流されまします。

新約聖書では、キリストの犠牲は罪の赦しのためとされています。ヨハネの福音 1:29 の中でこれを見ることが出来ます – 「**29** その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」ここでは、イエスを私たちの罪のために犠牲になる子羊と結びつけています。

私たちが主の晩餐と呼ぶ聖餐式は、この犠牲を記念するものです。使徒パウロはコリント人への手紙第一 11:23-26 でこのことを説明しています。 – 「**23** 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、**24** 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」 **25** 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」 **26** ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」

私たちのために犠牲となってくださったことを思い起こすこととしてします。そうすることで、私たちの主イエス・キリストの死は、先に引用した聖句に記されているように、私たちが主に信頼を置くとき、その死によって罪の赦しを受けるという大きな意味を持つことを、証人に宣言することにもなるのです。

使徒パウロは続けま。27-29 節 – 「**27** したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。**28** ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。**29** みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。」

若い頃、私たちは聖餐式の際に、自分自身を吟味し、聖餐式の席にふさわしく近づいているかどうか、つまり、自分の人生に告白されていない罪がない状態で聖餐式の席に近づいているかどうかを確かめるべきだと教えられました。私たちはまだ不完全な肉体の中で生きており、時には罪を犯すこともあるので、常に悔い改め、罪を告白する生活を送っていることを確認しなければなりません。もし、告白していない罪を抱えたまま主の晩餐に臨むなら、それは深刻な問題です。そうすることは、その罪を本当に悔い改める気がないことを示唆しており、それはクリスチャンの弟子としての生活に反することです。聖餐式に与る前に自己を吟味し、罪を告白しなければなりません。

使徒パウロは、他にも興味深いことを言っています。コリント人への手紙第一 10:16-17 を読みましょう。 – 「**16** 私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。**17** パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです。」

私たちキリスト者は、このパンと杯を分かち合うことに共に参加します。キリストの犠牲を記念して、キリストの体にも参加するのです。これが「聖餐式」という言葉の背景にある考え方です。私たちはキリストと交わり、兄弟姉妹、つまり私たちの仲間の信者と交わるのです。

誰が聖餐式に参加し、パンと杯に与ることができますか？ある教会では、聖餐式に参加できるのは自分たちの教派に属する教会の会員だけだと考えています。私たちの教会のように、イエス・キリストを主であり救い主であると信じるクリスチャンであれば、どの教派に属していても、主の晩餐にあずかることを歓迎している教会もあります。まだ洗礼を受けていなくてもあずかることができるという教会もあります。- 結局のところ、生まれながらのクリスチャンかどうかを決めるのは洗礼という行為ではなく、罪の赦しのためにイエス・キリストを信じる信仰なのです。日本の教会も含め、多くの教会では聖餐式を洗礼を受けたクリスチャンに限定しています。- しかし、私がこれまで関わってきた教会にはそのような制限はなく、OIC では聖餐式を洗礼を受けた信者だけに限定していません。聖餐式は、キリストを主であり救い主であると信じたすべての人に開かれています。

パート 2：主の晩餐時におけるキリストの臨在

聖餐式で使用するパンとぶどう酒について、キリスト教各派が抱えているいくつかの対照的な見解について、数分かけて説明させてください。これは深刻なテーマであり、キリスト教会の主要なグループ間で分裂を引き起こしているため、これらの問題を知っておくべきだと思います。イエスは言われました。「これはわたしの体である.....これはわたしの血である」。この言葉はいったい何を意味しているのでしょうか？パンとぶどう酒はイエスの体と血を象徴しているのでしょうか。それとも、私たちはこの言葉を文字通りにとらえ、パンとぶどう酒を本当にイエスの体であり、血であるとみなすのでしょうか？中世の間に、パンとぶどう酒の中のキリストの「真の臨在」と呼ばれる信仰が発展しました。この考えを裏付ける聖句のひとつが、ヨハネの福音書 6:53-54 です。- 「**53** イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。**54** わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」 ローマ・カトリック教会や、東方正教会やその関連する教会など、古くからのルーツを持つ東方の教会の多くは、この箇所を用いて、主の晩餐ではパンとぶどう酒が実際にイエスの体と血になると言っています。このようなことを言う教会もありますが、私は彼らに賛同しません。

プロテスタントの改革派はこの考えを否定した。ほとんどのプロテスタントは、ヨハネによる福音書 6 章のこの箇所を、イエスはパンとぶどう酒の要素が実際にイエスの体と血になることを示唆しているのではなく、むしろ霊的な真理を教えるために物理的なものを用いているのだと言うでしょう。ヨハネの福音書 6 章 35 節でも、イエスは同じようなことをしています。- 「**35** イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」ここでイエスは、文字通りの飢えや渇きが解消されるという意味ではなく、むしろ象徴的に、創造主との関係を求める霊的な飢えや霊的な渇きは、私たちがイエスのもとに来るときに満たされると言っています。

カトリックとは対照的に、ジョン・カルヴァンとプロテスタントの改革派と呼ばれる人たちは、私がより良いと思う視点を持っています。カルヴァンは、主の晩餐をキリストとの「神秘的な交わり」と呼び、キリストは儀式の中に存在するがキリストはエレメントそのもの（パンとぶどう酒）の中には存在しないとしました。一方、カトリックや東方教会は信じていますが、改革派の見解では、私たちクリスチャンは、この聖餐式にキリストと共に参加していますが、キリストはエレメントの中におられるのではなく、むしろ、私たちが主の晩餐に信仰をもってあずかることによって、聖餐式におられるのです。私たちがこの儀式で特別な霊的恩恵を受けるのは、信仰を持って参加することによってです。これは、長老派、オランダ改革派教会、一部の聖公会、改革派神学（カルヴァン主義神学とも呼ばれる）に従う一部のバプテストなどの教派の見解です。19世紀の有名なバプテスト派の牧師、チャールズ・スポルジョンはこの見解に従いました。¹

もうひとつの視点を、お伝えしなければならない視点があります。殆どのバプテストや超教派の教会を含め、今日の福音派の大半はこのような見方をしているようだからです。主の晩餐に関するこのような視点は、記念主義者のアプローチと呼ばれています。このアプローチでは、キリストは主の晩餐において特別な形で存在するのではなく、この儀式は単にキリストの犠牲と最後の晩餐を思い起こす記念であると言うのです。結局、ルカの福音書 22：19 やコリント人への手紙第一 11：24 にあるように、「わたしを覚えてこれを行ないなさい。」とイエスが言われたことによります。観点では、パンとぶどう酒は単に重要な現実を指し示す象徴であり、人類のために十字架上で捧げられた主の犠牲を思い起こさせ、宣言するものであるが、私たちの教会生活における他の時の主の臨在とは異なる特別な方法で、主が儀式に臨在されることはないのです。この見解の信奉者たちは、主の晩餐と洗礼について言及するときに「聖餐式」という言葉を使わず、むしろ「制定」という言葉を好みます。

記念主義的アプローチは、現代の福音派の多くの視点であり、皆さんの多くが教えられた視点かもしれません。また、先ほど概略を説明した改革派の視点に従う福音主義者も現代には多い。大阪国インターナショナルチャーチの歴史の中でも、この2つのアプローチのどちらかに従う牧師がいました。

パート 3: 洗礼

マタイの福音書 28:18-20 の大宣教命令にはこうあります：「**18** イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。**19** それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子ととなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、**20** また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

マタイの福音書 3:1-3 – 「**1** そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。**2** 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」 **3** この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」と言われたその人である。」

マルコの福音書 1:4-5 – 「**4** バプテスマのヨハネが荒野に現われて、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説いた。**5** そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。」

ルカの福音書 24:46-47 – 「46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

私はこれらの聖句の中のいくつかのキーポイントに焦点を当てたいと思います。バプテスマのヨハネは、マタイが引用したイザヤ書 40 章 3 節にあるように、「主の道を備える」ために神に定められた者です。その一環として、ヨハネは天の御国が近づいたことを告げ、「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」を説きます。明らかに、これは神の国の到来に備える方法であり、メシアの到来に備えることを意味します。悔い改めとは、罪に対する考えを改め、罪から離れ、神に立ち返ることを意味する。これが罪の赦しにつながります。

ローマ人への手紙 6:3-5 を読みましょう – 「3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。5 もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」

これはバプテスマの基本的な象徴です。バプテスマは死と復活であり、私たちの古い罪の人生に対する死と、新しい人生へのよみがえりです。ローマ人への手紙 6 章を読み進めると、私たちが送る新しい人生とは、罪を捨てることであることがわかります。そして、5 節には、「キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」と書かれています。それが私たちの未来です。私たち自身が復活し、イエスのようになり、永遠にイエスと共にいます。

バプテスマは初めから、弟子たちがキリスト教会という共同体に入るための入門であり、そこで私たちはキリストと互いに交わりながら生きる方法を学ぶと考えられてきました。通常、新しい改宗者に対しては、新しいクリスチャンが福音を理解し、また教会もその人がキリストに信仰を置いたことを確認できるように、指導の期間が設けられます。その後、父、子、聖霊の名によってバプテスマを授けます。

パート 4: 洗礼に関して異なる視点

キリスト教会の 2 つの重要な儀式、洗礼と主の晩餐について、意見の相違が目立ち、さまざまな教派の間で分裂を引き起こしているのは残念なことです。情熱は高く、伝統は深く、信念は非常に強いです。どの教会も、キリスト教の信仰を持つようになった人に喜んで洗礼を授けており、これらの教会の中には、クリスチャンの両親の生まれたばかりの幼児にも洗礼を授けているところもありますが、これは他の教会では否定されている習慣です。バプテスマの唯一の適切な方法は、新改宗者が完全に水に浸かることであると主張する教会もあれば、頭から水をかけたり振りかけたりすれば十分だと考える教会もあります。このようにさまざまな教会がそれぞれの信念を強く持っているため、多くの分裂を引き起こしています。私が 20 代の頃は、このような状況に落ち込むことも多かったのですが、最近では、キリスト教の現状を素直に受け入れ、自分とは異なる視

点を持つクリスチャン仲間を理解しようと努めています。私が学んだことのいくつかを皆さんにお伝えしたいと思います。これらの異なる習慣の背後にあるいくつかの理由を知っておくべきだと思います。

高校生の頃、私は友人の教会（長老派教会）に通っていました。そこで私は幼児の洗礼式に立ち会いました。長老派がこのような習慣を持っていることは知っていたものの、それが行われるのを初めて目の当たりにし、私の心に強い反応を引き起こした。新約聖書によれば、洗礼を受ける前に罪を悔い改め、メシアを信じるのだとしたら、赤ん坊にそんなことができるのだろうか？その教会での洗礼式中、私は立ち上がって、幼児に洗礼を受ける人々を叱責したくなりました。しかしもちろん、そんなことはしませんでした。私は見学者でした。それにまだ若かったのです。私は、長老派の人たちが幼児に洗礼を受けることを正当なことだと信じるには、何か理由があるに違いない、いつかその理由が何なのかを知る日が来るかもしれないと思いました。

実際、私は最終的にその理由のいくつかを知りました。まず、幼児に洗礼を受けるクリスチャンは、旧約聖書の割礼と新約聖書の洗礼の間に類似点があると考えます。彼らの考えでは、洗礼は神が神の民と結ばれた契約の象徴であり、親が幼児に洗礼を受けることは、キリスト教共同体の中で子供をキリスト者の弟子として育てるという決意を示すものです。これらの人々は、神が教会を発足させたのは新約聖書の時代ではなく、アブラハムの時代であり、アブラハムを神に選ばれた民の家長として召された時であると言います。このことは創世記 12 章、15 章、17 章に書かれています。17 章で、神はアブラハムと契約を結び、割礼のしるしによって契約を結ばれました。創世記 21 章 4 節で、幼子イサクは生まれて 8 日目に割礼を受けます。生まれたばかりの幼児にバプテスマを授けたいと願うクリスチャンにとって、この行為は旧約聖書の割礼と並行するものです。さらに、コロサイ人への手紙 2:10-13 を読めば、割礼とバプテスマが並行して行われていることがわかるでしょう。以上のような理由から、福音主義者の兄弟姉妹の多くは、クリスチャンの両親を持つ幼児にバプテスマを授けることは正当であり、望ましいことであると考えています。

[説教内では言いません: コロサイ人への手紙 2:10-13 – 「**10** そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。**11** キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。**12** あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。**13** あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、」

20 代の頃、この問題を研究していた私は、ある長老派の牧師が興味深いことを言っているのを聞きました。旧約聖書と新約聖書の間に強い連続性があると考えるクリスチャンは、幼児洗礼を実践する傾向があり、一方、聖書の間に強い不連続性があると考えるクリスチャンは、いわゆる「信者洗礼」に向かう傾向があります。

20 代の頃、私は長老派の教師に対して、神学的、実践的なさまざまなトピックについて大きな尊敬の念を抱いていました。また、旧約聖書と新約聖書の連続性については、福音主義者である私の仲間の多くよりも深く理解しています。しかし、新約聖書の物語部分を読むと、私が目にするのは、人々が罪を悔い改め、キリストを信じ、信仰を告白するよう求められていることです。私には、このパターンが最も良いように思えます。し

かし、多くの立派な福音主義、聖書を信じるクリスチャンが、この問題に関して私とは異なる視点を持っていることは認めます。

次に、福音主義クリスチャンの間で論争となっているもう一つの問題について述べましょう。それは、バプテスマを受ける人は完全に水に浸す必要があるのか、それとも頭から水をかけるだけで十分なのか、あるいは頭や額に水をかけるだけで十分なのかという問題です。バプテスト教派は、バプテスマは完全に水に浸すべきである、あるいは浸さなければならないという信念でよく知られています。私はバプテストの出身ですが、この問題に関してはかなり寛大です。私がこの問題をどのように考えているか、数分かけて説明しましょう。

新約聖書の物語部分を読むと、洗礼がどのように行われたかについて正確な記述は見られません。ヨハネの福音書 3:23 にヒントがあるかもしれません - 「**23** 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。」その場所には多くの水があったため、人々を浸すために多くの水が必要だったことを示唆しているのかもしれないが、洗礼の正確な方法について、ここでの証拠は決定的なものではない。

先ほどローマ人への手紙 6:4 を読みました - 「**4** 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」この聖句は、バプテスマについて、私たちに素晴らしいイメージを与えてくれます。バプテスマを受けるとき、私たちはキリストの死と同一視され、新しい命によみがえります。もし私たちが浸礼のバプテスマを受けるなら、これは、新しいクリスチャンが、死後墓の中に葬られ、キリストが墓からよみがえられたように、新しい命によみがえらされるという、とても素晴らしい例証です。この聖句は、私たちが浸礼によってバプテスマを受けなければならないとは言っていないですが、これは実に素晴らしい例示だと思います。

それは、20 代半ばにジョン・マッカーサーの教会で神学コースを受講したときに学んだことで、ローマ人への手紙 6 章を用いても、浸礼が適切な方法であるとは言えないということです。そのコースで学んだことは、入院中の人がキリストに従う決心をした場合、私たちはその人にバプテスマを施したいと思うのですが、改宗者の健康状態が良くないために、浸礼の儀式を行うことが現実的でなかったり、望ましくなかったりすることがよくあるということです。このような状況下では、バプテスト派の牧師でさえ、頭に水を注ぐか振りかけるかして儀式を行うでしょう。このような実的な必要性に対する譲歩は、キリスト教時代の初期からキリスト教の慣習の一部となっています。

紀元 100 年頃に書かれた『ディダケー（十二人の教え）』と呼ばれる古代の教会教典の第 7 章には、洗礼について次のような記述があります：

さて、バプテスマについてだが、これがバプテスマのやり方である。そして、父と子と聖霊の名によって、流水でバプテスマを授けなさい。もし流水がなければ、他の水でバプテスマを授けなさい。冷たい水がなければ、温かい水で。どちらもない場合は、父と子と聖霊の名によって、頭に三度水をかけなさい。

水が足りなければ、頭からかけてもいい。これは、第一の選択は、人が完全に水の中に入り、完全に浸かることであることを意味しています。しかし同時に、現実的な必要性から譲歩しなければならないことも、非常に早い時期から認識されていました。完全な浸礼が現実的でない場合、頭から水をかけることは許容される代替手段です。教会の歴史が中世に進むにつれて、注水や散水による洗礼が標準となりましたが、実際には浸礼がキリストのうちに新しい生命を得ることを最もよく表しており、これが教会の初期に好まれた習慣であったことを示す十分な証拠があります。

ここ大阪インターナショナルチャーチでは、イエス・キリストの福音を信じることを表明した人にバプテスマを授ける、いわゆる信者バプテスマを実践しています。バプテスマの方法については、浸礼が一般的ですが、私は、メソジスト派の牧師がいたときに、散水によるバプテスマに立ち会ったことがあります。私たちの信仰声明と教会定款には、バプテスマがどのように行われるべきかという具体的な規定はありません。私たちはさまざまな背景を持つ福音主義クリスチャンを受け入れるために設立されたのですからです。当教会の設立の際、教派を超えたという性質上、幼児洗礼を受けたクリスチャンであっても、成人としてキリスト教信仰を告白しているのであれば、会員として受け入れるというのが、当初からの OIC の方針です。

結論

今日、私は洗礼と聖餐式という二つの重要なキリスト教の儀式について皆さんと話し合い、両者の聖書的な基礎を分かち合うとともに、キリスト教共同体の中に存在する、両者に関するいくつかの異なる考え方について説明しました。これから数分間、洗礼と聖餐式の背後にある象徴についてもう一度考えてみてください。

今日、ここにおられるキリストにある兄弟姉妹へ、皆さんが洗礼というものを、どの様に描いておられるのかを聞きたいと思います。すなわち古い罪が死んで、そしてキリストの内に新しい命としてよみがえるという洗礼についてです。ローマ 6:4 - 「**4** 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。」 6 節 - 「**6** 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」これはクリスチャンのライフスタイルの土台です。それは神に対して恥ずべき、いかなることをも捨てることです。聖餐式は、私たちが、私たちの罪のためのキリストの犠牲、そして心を新たにし、心と魂と力を尽くして神を愛することを思い起こす時です。

もしまだキリストを救い主として信じていないなら、今日それを行うことができます。礼拝の後、牧師や私、あるいは役員の一人与って話していただければ、イエス・キリストにある救いの道をお教えします。私たちは喜んであなたに道をお示しします。

説教題：「OIC のアイデンティティ、パート 3—洗礼と主の晩餐（聖餐）の儀式」

鍵となる聖句：使徒 2:41-42 「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。⁴²そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」

皆さん、おはようございます。また皆さんにお会いできてうれしいです。私は、教派を超えた福音主義的なプロテスタント教会としての大阪インターナショナルチャーチのアイデンティティをテーマに、一連の説教を行ってきました。最初の説教では、「プロテスタントであること」「福音主義であること」「教派を超えていること」という3つの形容詞のそれぞれの意味を説明しました。私たちは異なる教派に属していますが、正統派プロテスタントと福音主義キリスト教の基本的教義を堅持しています。これが私たちの共通点です。しかし、私たちは異なる教派の出身であるため、私たちの間には間違いなくいくつかの相違点があります。それにもかかわらず、私たちは互いに慈愛の心を持ち、キリスト教の弟子としての歩み、交わり、奉仕において共に歩むことを目指します。

このシリーズの第2回目の説教では、大阪インターナショナルチャーチの会則に記されている「目的」に焦点を当てました。もう一度、その文章を読んでみましょう：

本教会の目的は、神を礼拝し、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、教え、主の晩餐とバプテスマを祝うことにある。私たちは、すべての人を主の救いの知識に導き、神の礼拝を共にするためにイエス・キリストに従う者同士を結びつけ、人生のあらゆる関係においてイエス・キリストがよりよく知られ、よりよく愛され、よりよく仕えられるように努める。

OIC の主な目的のひとつは、洗礼と主の晩餐（聖餐式とも呼ばれる）を祝うことである、という最初の文章に注目してください。今日の説教の焦点は、キリスト教会のこの2つの重要な儀式にあります。キリスト教時代の初めから、この2つの儀式は教会生活と宣教に不可欠なものでした。私が「儀式」と呼んでいることに注目してください。どちらも独自の機能を持ち、何かを象徴するものとして注目されています。何を象徴しているのでしょうか？それを説明することが、今日のメッセージの目的の一つです。

今日の説教のタイトルは「OIC のアイデンティティ」です：洗礼と主の晩餐（聖餐式）の儀式"です。キリスト教の伝統では、この二つの儀式はしばしば「秘跡」と呼ばれてきました。「秘跡」とはこのように定義されています：「恵みの目に見えない現実の目に見えるしるし」であり、あるいは「贖罪の神聖な神秘を教会を超えて指し示す教会内のしるし」である。¹ プロテスタントのキリスト教徒は、教会生活にとって重要な2つの秘跡、すなわち洗礼と主の晩餐について語ります。多くのキリスト教徒はこの2つの儀式を「秘跡」と呼びますが、プロテスタント運動の他のキリスト教徒は「制定」と呼ぶことを好みます。というのも、この二つの儀式は、キリストがすべてのクリスチャンに参加するように命じた、つまり命じられたものだからです。（マタイ 26:26-29、28:18-20、また第一コリント 11:23-26）。私が関わってきた福音主義教会のほとんどは、これらの儀式を「制定」と呼ぶことを好んでおり、OIC でもそのように呼んでいます。

先程、秘跡とは、「贖罪の神聖な神秘を教会を超えて指し示す教会内のしるし」だと言いました。洗礼は、キリストにある新しい人生へ向かうしるしです。エペソ人への手紙 2 章 5 節にあるように、私たちはかつて「罪のために死んでいましたが、今はキリストによって生かされています」。そして、主の晩餐は、私たちの罪のためのキリストの犠牲、私たちの贖いを思い起こさせるしるしです(コリント人への手紙第一 11 章、マタイの福音書 26 章) であり、私たちの一致を象徴するクリスチャンの兄弟姉妹と分かち合う食事でもあります。さらに、主の晩餐は、キリストが御国を樹立するために再臨されるときに、キリストとともに食事を分かち合うことを予期させるものでもあります。そのため、主の晩餐は聖餐式とも呼ばれるのです。それは、仲間のクリスチャンとの交わり、そして主との交わりなのです。

では、キリスト教会のこの 2 つの制定（または秘跡）を詳しく見てみましょう。

パート 1: 主の晩餐 (聖餐式)

これは、私たちの主イエス・キリストが十字架につけられる直前に制定したものです。マタイの福音書とルカの福音書を読んでみましょう。

マタイの福音書 26:1-2 – 「**1** イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。**2** 「あなたがたの知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

それから 2 日後、次のことをルカの福音書 22:7-8 で読みます。 – 「**7** さて、過越の小羊のほふられる、種なしパンの日が来た。**8** イエスは、こう言ってペテロとヨハネを遣わされた。「わたしたちの過越の食事ができるように、準備をしに行きなさい。」

マタイの福音書 26:26-28 – 「**26** また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」 **27** また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。**28** これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。」

私たちはこのエピソードを「最後の晩餐」と呼んでいます。主イエスが十字架につけられる前日、弟子たちと過越の食事を共にした時のことです。ユダヤ教の過越の祭りとのつながりに注目してみましょう。この祭りは、出エジプト記に記述されているように、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放されたことを記念するもので、神がエジプトにもたらした十の災いの最後には、子羊を生け贄として捧げ、その血を家の門柱に撒いた家庭の子供たちを除いて、国中のすべての初子が死にました。出エジプト記 12 章で、その物語を読むことが出来ます。滅ぼす天使が来たとき、その天使は子羊の血を門柱に塗った家々の上を通り過ぎ、何の影響も受けませんでした。その天使はこれらの家の上を通り過ぎたので、この祭りは過越祭りと呼ばれるようになりました。

キリストは私たちの過越の小羊と呼ばれ、私たちを裁きから救うための犠牲となる小羊です。

コリント人への手紙第一 5:7 後半でこのように言われています – 「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」先ほど読んだ聖句を思い起こすなら、最後の晩餐とキリストの十字架刑は、毎年行われる過越祭りの時に行われ、イエスの死は過越祭の犠牲と同一視されているのが分かります。

イエスはパンと杯を、罪の赦しのために多くの人のために流される御自身の体と御自身の血とを、どのように結びつけておられるかに注目してほしいです。パンとぶどう酒は、イエスの体と血を象徴しています。彼の体はやがて十字架にかけられ、その血が流されまします。

新約聖書では、キリストの犠牲は罪の赦しのためとされています。ヨハネの福音 1:29 の中でこれを見ることが出来ます – 「**29** その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」ここでは、イエスを私たちの罪のために犠牲になる子羊と結びつけています。

私たちが主の晩餐と呼ぶ聖餐式は、この犠牲を記念するものです。使徒パウロはコリント人への手紙第一 11:23-26 でこのことを説明しています。 – 「**23** 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、**24** 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」 **25** 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」 **26** ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」

私たちのために犠牲となってくださったことを思い起こすこととしてします。そうすることで、私たちの主イエス・キリストの死は、先に引用した聖句に記されているように、私たちが主に信頼を置くとき、その死によって罪の赦しを受けるという大きな意味を持つことを、証人に宣言することにもなるのです。

使徒パウロは続けま。27-29 節 – 「**27** したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。**28** ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。**29** みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。」

若い頃、私たちは聖餐式の際に、自分自身を吟味し、聖餐式の席にふさわしく近づいているかどうか、つまり、自分の人生に告白されていない罪がない状態で聖餐式の席に近づいているかどうかを確かめるべきだと教えられました。私たちはまだ不完全な肉体の中で生きており、時には罪を犯すこともあるので、常に悔い改め、罪を告白する生活を送っていることを確認しなければなりません。もし、告白していない罪を抱えたまま主の晩餐に臨むなら、それは深刻な問題です。そうすることは、その罪を本当に悔い改める気がないことを示唆しており、それはクリスチャンの弟子としての生活に反することです。聖餐式に与る前に自己を吟味し、罪を告白しなければなりません。

使徒パウロは、他にも興味深いことを言っています。コリント人への手紙第一 10:16-17 を読みましょう。 – 「**16** 私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。**17** パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです。」

私たちキリスト者は、このパンと杯を分かち合うことに共に参加します。キリストの犠牲を記念して、キリストの体にも参加するのです。これが「聖餐式」という言葉の背景にある考え方です。私たちはキリストと交わり、兄弟姉妹、つまり私たちの仲間の信者と交わるのです。

誰が聖餐式に参加し、パンと杯に与ることができますか？ある教会では、聖餐式に参加できるのは自分たちの教派に属する教会の会員だけだと考えています。私たちの教会のように、イエス・キリストを主であり救い主であると信じるクリスチャンであれば、どの教派に属していても、主の晩餐にあずかることを歓迎している教会もあります。まだ洗礼を受けていなくてもあずかることができるという教会もあります。- 結局のところ、生まれながらのクリスチャンかどうかを決めるのは洗礼という行為ではなく、罪の赦しのためにイエス・キリストを信じる信仰なのです。日本の教会も含め、多くの教会では聖餐式を洗礼を受けたクリスチャンに限定しています。- しかし、私がこれまで関わってきた教会にはそのような制限はなく、OIC では聖餐式を洗礼を受けた信者だけに限定していません。聖餐式は、キリストを主であり救い主であると信じたすべての人に開かれています。

パート 2：主の晩餐時におけるキリストの臨在

聖餐式で使用するパンとぶどう酒について、キリスト教各派が抱えているいくつかの対照的な見解について、数分かけて説明させてください。これは深刻なテーマであり、キリスト教会の主要なグループ間で分裂を引き起こしているため、これらの問題を知っておくべきだと思います。イエスは言われました。「これはわたしの体である.....これはわたしの血である」。この言葉はいったい何を意味しているのでしょうか？パンとぶどう酒はイエスの体と血を象徴しているのでしょうか。それとも、私たちはこの言葉を文字通りにとらえ、パンとぶどう酒を本当にイエスの体であり、血であるとみなすのでしょうか？中世の間に、パンとぶどう酒の中のキリストの「真の臨在」と呼ばれる信仰が発展しました。この考えを裏付ける聖句のひとつが、ヨハネの福音書 6:53-54 です。- 「**53** イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。**54** わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」 ローマ・カトリック教会や、東方正教会やその関連する教会など、古くからのルーツを持つ東方の教会の多くは、この箇所を用いて、主の晩餐ではパンとぶどう酒が実際にイエスの体と血になると言っています。このようなことを言う教会もありますが、私は彼らに賛同しません。

プロテスタントの改革派はこの考えを否定した。ほとんどのプロテスタントは、ヨハネによる福音書 6 章のこの箇所を、イエスはパンとぶどう酒の要素が実際にイエスの体と血になることを示唆しているのではなく、むしろ霊的な真理を教えるために物理的なものを用いているのだと言うでしょう。ヨハネの福音書 6 章 35 節でも、イエスは同じようなことをしています。- 「**35** イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」ここでイエスは、文字通りの飢えや渇きが解消されるという意味ではなく、むしろ象徴的に、創造主との関係を求める霊的な飢えや霊的な渇きは、私たちがイエスのもとに来るときに満たされると言っています。

カトリックとは対照的に、ジョン・カルヴァンとプロテスタントの改革派と呼ばれる人たちは、私がより良いと思う視点を持っています。カルヴァンは、主の晩餐をキリストとの「神秘的な交わり」と呼び、キリストは儀式の中に存在するがキリストはエレメントそのもの（パンとぶどう酒）の中には存在しないとしました。一方、カトリックや東方教会は信じていますが、改革派の見解では、私たちクリスチャンは、この聖餐式にキリストと共に参加していますが、キリストはエレメントの中におられるのではなく、むしろ、私たちが主の晩餐に信仰をもってあずかることによって、聖餐式におられるのです。私たちがこの儀式で特別な霊的恩恵を受けるのは、信仰を持って参加することによってです。これは、長老派、オランダ改革派教会、一部の聖公会、改革派神学（カルヴァン主義神学とも呼ばれる）に従う一部のバプテストなどの教派の見解です。19世紀の有名なバプテスト派の牧師、チャールズ・スポルジョンはこの見解に従いました。¹

もうひとつの視点を、お伝えしなければならない視点があります。殆どのバプテストや超教派の教会を含め、今日の福音派の大半はこのような見方をしているようだからです。主の晩餐に関するこのような視点は、記念主義者のアプローチと呼ばれています。このアプローチでは、キリストは主の晩餐において特別な形で存在するのではなく、この儀式は単にキリストの犠牲と最後の晩餐を思い起こす記念であると言うのです。結局、ルカの福音書 22：19 やコリント人への手紙第一 11：24 にあるように、「わたしを覚えてこれを行ないなさい。」とイエスが言われたことによります。観点では、パンとぶどう酒は単に重要な現実を指し示す象徴であり、人類のために十字架上で捧げられた主の犠牲を思い起こさせ、宣言するものであるが、私たちの教会生活における他の時の主の臨在とは異なる特別な方法で、主が儀式に臨在されることはないのです。この見解の信奉者たちは、主の晩餐と洗礼について言及するときに「聖餐式」という言葉を使わず、むしろ「制定」という言葉を好みます。

記念主義的アプローチは、現代の福音派の多くの視点であり、皆さんの多くが教えられた視点かもしれません。また、先ほど概略を説明した改革派の視点に従う福音主義者も現代には多い。大阪国インターナショナルチャーチの歴史の中でも、この2つのアプローチのどちらかに従う牧師がいました。

パート 3: 洗礼

マタイの福音書 28:18-20 の大宣教命令にはこうあります：「**18** イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。**19** それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子ととなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、**20** また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

マタイの福音書 3:1-3 – 「**1** そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。**2** 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」 **3** この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」と言われたその人である。」

マルコの福音書 1:4-5 – 「**4** バプテスマのヨハネが荒野に現われて、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説いた。**5** そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。」

ルカの福音書 24:46-47 – 「**46** こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、**47** その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

私はこれらの聖句の中のいくつかのキーポイントに焦点を当てたいと思います。バプテスマのヨハネは、マタイが引用したイザヤ書 40 章 3 節にあるように、「主の道を備える」ために神に定められた者です。その一環として、ヨハネは天の御国が近づいたことを告げ、「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」を説きます。明らかに、これは神の国の到来に備える方法であり、メシアの到来に備えることを意味します。悔い改めとは、罪に対する考えを改め、罪から離れ、神に立ち返ることを意味する。これが罪の赦しにつながります。

ローマ人への手紙 6:3-5 を読みましょう – 「**3** それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。**4** 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。**5** もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」

これはバプテスマの基本的な象徴です。バプテスマは死と復活であり、私たちの古い罪の人生に対する死と、新しい人生へのよみがえりです。ローマ人への手紙 6 章を読み進めると、私たちが送る新しい人生とは、罪を捨てることであることがわかります。そして、5 節には、「キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」と書かれています。それが私たちの未来です。私たち自身が復活し、イエスのようになり、永遠にイエスと共にいます。

バプテスマは初めから、弟子たちがキリスト教会という共同体に入るための入門であり、そこで私たちはキリストと互いに交わりながら生きる方法を学ぶと考えられてきました。通常、新しい改宗者に対しては、新しいクリスチャンが福音を理解し、また教会もその人がキリストに信仰を置いたことを確認できるように、指導の期間が設けられます。その後、父、子、聖霊の名によってバプテスマを授けます。

パート 4: 洗礼に関して異なる視点

キリスト教会の 2 つの重要な儀式、洗礼と主の晩餐について、意見の相違が目立ち、さまざまな教派の間で分裂を引き起こしているのは残念なことです。情熱は高く、伝統は深く、信念は非常に強いです。どの教会も、キリスト教の信仰を持つようになった人に喜んで洗礼を授けており、これらの教会の中には、クリスチャンの両親の生まれたばかりの幼児にも洗礼を授けているところもありますが、これは他の教会では否定されている習慣です。バプテスマの唯一の適切な方法は、新改宗者が完全に水に浸かることであると主張する教会もあれば、頭から水をかけたり振りかけたりすれば十分だと考える教会もあります。このようにさまざまな教会がそれぞれの信念を強く持っているため、多くの分裂を引き起こしています。私が 20 代の頃は、このような状況に落ち込むことも多かったのですが、最近では、キリスト教の現状を素直に受け入れ、自分とは異なる視

点を持つクリスチャン仲間を理解しようと努めています。私が学んだことのいくつかを皆さんにお伝えしたいと思います。これらの異なる習慣の背後にあるいくつかの理由を知っておくべきだと思います。

高校生の頃、私は友人の教会（長老派教会）に通っていました。そこで私は幼児の洗礼式に立ち会いました。長老派がこのような習慣を持っていることは知っていたものの、それが行われるのを初めて目の当たりにし、私の心に強い反応を引き起こした。新約聖書によれば、洗礼を受ける前に罪を悔い改め、メシアを信じるのだとしたら、赤ん坊にそんなことができるのだろうか？その教会での洗礼式中、私は立ち上がって、幼児に洗礼を受ける人々を叱責したくなりました。しかしもちろん、そんなことはしませんでした。私は見学者でした。それにまだ若かったのです。私は、長老派の人たちが幼児に洗礼を受けることを正当なことだと信じるには、何か理由があるに違いない、いつかその理由が何なのかを知る日が来るかもしれないと思いました。

実際、私は最終的にその理由のいくつかを知りました。まず、幼児に洗礼を受けるクリスチャンは、旧約聖書の割礼と新約聖書の洗礼の間に類似点があると考えます。彼らの考えでは、洗礼は神が神の民と結ばれた契約の象徴であり、親が幼児に洗礼を受けることは、キリスト教共同体の中で子供をキリスト者の弟子として育てるという決意を示すものです。これらの人々は、神が教会を発足させたのは新約聖書の時代ではなく、アブラハムの時代であり、アブラハムを神に選ばれた民の家長として召された時であると言います。このことは創世記 12 章、15 章、17 章に書かれています。17 章で、神はアブラハムと契約を結び、割礼のしるしによって契約を結ばれました。創世記 21 章 4 節で、幼子イサクは生まれて 8 日目に割礼を受けます。生まれたばかりの幼児にバプテスマを授けたいと願うクリスチャンにとって、この行為は旧約聖書の割礼と並行するものです。さらに、コロサイ人への手紙 2:10-13 を読めば、割礼とバプテスマが並行して行われていることがわかるでしょう。以上のような理由から、福音主義者の兄弟姉妹の多くは、クリスチャンの両親を持つ幼児にバプテスマを授けることは正当であり、望ましいことであると考えています。

[説教内では言いません: コロサイ人への手紙 2:10-13 – 「**10** そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。**11** キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。**12** あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。**13** あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、」

20 代の頃、この問題を研究していた私は、ある長老派の牧師が興味深いことを言っているのを聞きました。旧約聖書と新約聖書の間に強い連続性があると考えるクリスチャンは、幼児洗礼を実践する傾向があり、一方、聖書の間に強い不連続性があると考えるクリスチャンは、いわゆる「信者洗礼」に向かう傾向があります。

20 代の頃、私は長老派の教師に対して、神学的、実践的なさまざまなトピックについて大きな尊敬の念を抱いていました。また、旧約聖書と新約聖書の連続性については、福音主義者である私の仲間の多くよりも深く理解しています。しかし、新約聖書の物語部分を読むと、私が目にするのは、人々が罪を悔い改め、キリストを信じ、信仰を告白するよう求められていることです。私には、このパターンが最も良いように思えます。し

かし、多くの立派な福音主義、聖書を信じるクリスチャンが、この問題に関して私とは異なる視点を持っていることは認めます。

次に、福音主義クリスチャンの間で論争となっているもう一つの問題について述べましょう。それは、バプテスマを受ける人は完全に水に浸す必要があるのか、それとも頭から水をかけるだけで十分なのか、あるいは頭や額に水をかけるだけで十分なのかという問題です。バプテスト教派は、バプテスマは完全に水に浸すべきである、あるいは浸さなければならないという信念でよく知られています。私はバプテストの出身ですが、この問題に関してはかなり寛大です。私がこの問題をどのように考えているか、数分かけて説明しましょう。

新約聖書の物語部分を読むと、洗礼がどのように行われたかについて正確な記述は見られません。ヨハネの福音書 3:23 にヒントがあるかもしれません - 「**23** 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。」その場所には多くの水があったため、人々を浸すために多くの水が必要だったことを示唆しているのかもしれないが、洗礼の正確な方法について、ここでの証拠は決定的なものではない。

先ほどローマ人への手紙 6:4 を読みました - 「**4** 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」この聖句は、バプテスマについて、私たちに素晴らしいイメージを与えてくれます。バプテスマを受けるとき、私たちはキリストの死と同一視され、新しい命によみがえります。もし私たちが浸礼のバプテスマを受けるなら、これは、新しいクリスチャンが、死後墓の中に葬られ、キリストが墓からよみがえられたように、新しい命によみがえらされるという、とても素晴らしい例証です。この聖句は、私たちが浸礼によってバプテスマを受けなければならないとは言っていないですが、これは実に素晴らしい例示だと思います。

それは、20 代半ばにジョン・マッカーサーの教会で神学コースを受講したときに学んだことで、ローマ人への手紙 6 章を用いても、浸礼が適切な方法であるとは言えないということです。そのコースで学んだことは、入院中の人がキリストに従う決心をした場合、私たちはその人にバプテスマを施したいと思うのですが、改宗者の健康状態が良くないために、浸礼の儀式を行うことが現実的でなかったり、望ましくなかったりすることがよくあるということです。このような状況下では、バプテスト派の牧師でさえ、頭に水を注ぐか振りかけるかして儀式を行うでしょう。このような実的な必要性に対する譲歩は、キリスト教時代の初期からキリスト教の慣習の一部となっています。

紀元 100 年頃に書かれた『ディダケー（十二人の教え）』と呼ばれる古代の教会教典の第 7 章には、洗礼について次のような記述があります：

さて、バプテスマについてだが、これがバプテスマのやり方である。そして、父と子と聖霊の名によって、流水でバプテスマを授けなさい。もし流水がなければ、他の水でバプテスマを授けなさい。冷たい水がなければ、温かい水で。どちらもない場合は、父と子と聖霊の名によって、頭に三度水をかけなさい。

水が足りなければ、頭からかけてもいい。これは、第一の選択は、人が完全に水の中に入り、完全に浸かることであることを意味しています。しかし同時に、現実的な必要性から譲歩しなければならないことも、非常に早い時期から認識されていました。完全な浸礼が現実的でない場合、頭から水をかけることは許容される代替手段です。教会の歴史が中世に進むにつれて、注水や散水による洗礼が標準となりましたが、実際には浸礼がキリストのうちに新しい生命を得ることを最もよく表しており、これが教会の初期に好まれた習慣であったことを示す十分な証拠があります。

ここ大阪インターナショナルチャーチでは、イエス・キリストの福音を信じることを表明した人にバプテスマを授ける、いわゆる信者バプテスマを実践しています。バプテスマの方法については、浸礼が一般的ですが、私は、メソジスト派の牧師がいたときに、散水によるバプテスマに立ち会ったことがあります。私たちの信仰声明と教会定款には、バプテスマがどのように行われるべきかという具体的な規定はありません。私たちはさまざまな背景を持つ福音主義クリスチャンを受け入れるために設立されたのですからです。当教会の設立の際、教派を超えたという性質上、幼児洗礼を受けたクリスチャンであっても、成人としてキリスト教信仰を告白しているのであれば、会員として受け入れるというのが、当初からの OIC の方針です。

結論

今日、私は洗礼と聖餐式という二つの重要なキリスト教の儀式について皆さんと話し合い、両者の聖書的な基礎を分かち合うとともに、キリスト教共同体の中に存在する、両者に関するいくつかの異なる考え方について説明しました。これから数分間、洗礼と聖餐式の背後にある象徴についてもう一度考えてみてください。

今日、ここにおられるキリストにある兄弟姉妹へ、皆さんが洗礼というものを、どの様に描いておられるのかを聞きたいと思います。すなわち古い罪が死んで、そしてキリストの内に新しい命としてよみがえるという洗礼についてです。ローマ 6:4 - 「**4** 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。」 6 節 - 「**6** 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」これはクリスチャンのライフスタイルの土台です。それは神に対して恥ずべき、いかなることをも捨てることです。聖餐式は、私たちが、私たちの罪のためのキリストの犠牲、そして心を新たにし、心と魂と力を尽くして神を愛することを思い起こす時です。

もしまだキリストを救い主として信じていないなら、今日それを行うことができます。礼拝の後、牧師や私、あるいは役員の一人与って話していただければ、イエス・キリストにある救いの道をお教えします。私たちは喜んであなたに道をお示しします。